

## 「クリエイターの話 ～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 立花 克樹

### 『創作のはじまり』

私の場合、作品を制作する際、何が「創作のはじまり」となるか、この機会に整理してみようと思いました。アナザーストーリーを作品に添えてお話していきます。

学生時代から、クスの原木を素材にしていました。その頃は、全国から木材が集まる福岡県大川市において、年に数回行われる「競り」に参加させていただいていました。売れ残りの原木や廃材となる部位を格安で譲っていただけるので、大変助かっていました。市場ではスケッチブックと鉛筆、スケールを手に、その場でアイデアスケッチを繰り返します。今思い返すと、この行為そのものが、私の「創作のはじまり」であったように思います。木がもつ「成るべくして成った」形がもつエネルギーを極力失わせないように、「最低限で最高の形」を目指していました。魅力的な原木に出会ったときは、導かれるように形を追い、チェーンソーを使って制作していました。半面、原木のエネルギーが左右されすぎて求めるものが見えてこなかったり、逆に好きな形に原木を押し込みすぎて素材のエネルギーを失わせてしまったりすることも多々ありました。この加減がわからずに、しばらくは悪戦苦闘していました。当時、会員の皆様から、「形」についての様々なアドバイスをいただきました。ファインアートの「形」を追いがちな私の考え方に、「デザイン」の考え方が少しずつ浸透していきます。



【duct 2006】 2006年 W90×D60×H140 クス材

この木は本来、上下逆さまに生えていたもの。結果的に、自然に逆らった作品となった。二股に分かれる直前の部位で、家具材としては、木目が入り混じり、研磨に向かないことから嫌われる部位である。加工には手間がかかるが、その分思いもよらない表情を見せる。

木を削っているとき、立ち寄った人は必ず素材を触ります。撫でます。「木はいいねえ～」と愛でます。木材の魅力の一つです。そこで、より具体的に、原木に「機能」を与える作品に没頭する時期がありました。ジャングルジムや、トンネル、滑り台といった、「遊ぶ機能」を意図的に取り込んでいきました。次第に、「遊ぶ」から「乗る」という極めて単純な機能に移り変わり、より生活に沿った作品へ変わっていきました。



【ヤマノシャチ】2013年 W120×D100×H130 クス材

「乗るならイルカやシャチに、、」と、接地面を海面に見立て、泳がせた作品。意図的に見える穴は、実を言うと、内割りに失敗しただけである。他の作品でも内割りの際、何度か失敗しているが、ほとんどはごまかしている。（と思っている）



【ヤマノカメ】2016年 W90×D130×H40 クス材

「寝るならこんなとこに、」と、裏返ってじたばたするカメの甲羅をイメージした大きな器。自分で競り落とし、厚切りした原木を10年寝かせ、使用した。乾燥した木材は、刃物が入りやすく、心地よく切削できる。



【LIFE ~つながり~】2011年 W120×D100×H130 クヌ材

会員推挙作品。ボリビアに招待されるきっかけとなった思い出のある作品。上部と下部は違う原木である。幾重にも股分かれしており、最も廃棄される部位。ほとんど無料で引き取ったと記憶している。実は原木と出会った際、「あの漫画の悪役が乗ってた乗り物みたいにしたい、、」という思いが「創作のはじまり」だった、、

<立花 克樹 プロフィール>

---



- 1979年 宮崎市生まれ  
2001年 第65回新制作展に初入選  
2002年 渡欧、ヘルシンキ環境造形展覧会等  
2007年 個展「木の造形」(宮崎/UMKギャラリー)  
2008年 第72回新制作展 新作家賞  
2009年 第73回新制作展 新作家賞  
2011年 第75回新制作展 会員推挙  
2012年 ボリビア国際彫刻シンポジウム招待制作  
(ボリビア・サンタクルス)  
豊福知徳と11人の作家展(福岡/太宰府館)  
wonder art space(宮崎/みやざきアートセンター)  
2019年 Funagoya トリエンナーレ 2018(福岡/九州芸文館)  
現在 宮崎大学教育学部附属中学校 美術科教諭